みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.96

ひと言

いま学校と教員に求められている課題は何なのだろう

数見　隆生（センター代表運営委員）

いま学校と教員が心身ともにかなり閉塞状況に陥っているというのは、多くの教育関係者の共通感覚であろう。それは一体どこからきているのだろうか。

働き方改革で10％の仕事量を減らせという指示が上から個々の教員に降りていると聞く。他方でいじめ調査を個々の子どもに面談して報告書を提出しなければならないとも聞く。今日の教員は一定の時間枠の中で何を大事にし、どんな仕事に集中すべきなのだろうか。

この問題は各学校と個々の教員の教育観に関わる問題である。教育という仕事をどう考えるかの問題である。その〝観〟なしに、上からの行政の枠づけ（スタンダード通りの教育課程）を遂行し、余分なことは一切削減していくという学校や教育状況のもとで、どういう子どもが育っていくのだろうか。

ダラダラと教職員の勤務時間を長引かせることは否定するが、今問われているのは雑務と本務の質的判断であり、人間を育てる学びや活動が十分なされているのか、そのための教員の自由と余裕がどれだけ保障されているのか、という問題である。そのことで各学校の教員が一枚岩になれているのかという課題だと私は思っている。

目次

ひと言　数見　隆生　1
映画「学校」を創る中で考えたこと　阿部　勉　2
岩川報告を読んで　私の「あと30㎝」
かず君とわたし　中原　和子　8
越えさせるものは何だろう？　佐藤　正夫　10
子どもを多面的に見る　小澤　登　11
ケアされる喜びとケアする喜び　菅原　梨沙　12
共に学び・育つ　尾形　誉子　13
本当は多様な先生と子ども達　佐久間千枝　14
30センチの向こう側を感じること　里見由紀子　15
「評価の三角形」を越える　鈴木　康史　17
教育時評
カタカナ英語の氾濫は何をもたらしているのか　本田　伊克　18
子どもと学校
親も子も　共に成長を　鷲尾　仁美　19
未来への希望を手わたしたい　及川さち子　19
個性を認める教育を　押野　身和　20
わたしの出会った先生　27
こうして今の「私」がある　小幡佳緒里　21
相談センター報告 第17回
親から自立をするためには　菊田　絹子　22
おすすめ映画
「未知との遭遇」　宮原　淳子　24
センターの動き　24

写真：千葉　建夫／山口まなみ　題字：江島　隆二

映画「学校」を創る中で考えたこと

映画監督　阿部　勉

２０１９年春、映画『男はつらいよ』シリーズの最新作『男はつらいよ　お帰り寅さん』の初号試写が行われた。第１作が公開されたのは１９６９年。今年で50年目を迎える。48本つくられたシリーズ最終作が封切られてからでも20数年が経過している。

私たち関係者は、完成した映画を観て驚いた。単に昔を懐かしむような映画ではない。50年の歳月と現代が力強く結びつき、私たちに多くのことを問いかけてくる。試写室が明るくなると、みな一様に目を赤くしながら微笑んでいた。

映画の完成に何度も立会いながら、こんなに感動的な瞬間にめぐり合うことは滅多にない。映画『学校』の初号試写の時がそうだったかなと思いながら帰宅したところで、瀬成田実君からメールが届いた。宮城県教職員組合主催の「明日の授業のための教育講座」で講演をお願いしたいとのことだった。

瀬成田君、いや瀬成田先生とは高校でクラスと部活が一緒だった縁もあり、今でも時々会って楽しいお酒を呑む仲である。「映画づくりの裏話など、楽しい話を」とのことだったので、気軽に引き受けたのだが、しばらくして「映画『学校』シリー

ズにテーマを絞って、教育現場へのメッセージをお願いしたい」との連絡があった。

教育の専門家である先生方に私からメッセージをなんて無理だと断ろうと思ったのだが、組合のみなさんで相談した結果だという。映画『学校』が公開されたのは1993年。既に四半世紀が過ぎている。私自身にとっても忘れられない作品であることは間違いないが、そんな古い映画を今の若い先生が観たらどんな感想を持つのだろうか。そんな疑問と好奇心から私は承諾のメールを送り、講演の構想を練り始めた。

映画『学校』が公開された頃、私も全国各地の上映会に招かれ映画の裏話などをしたことがあった。上映の余韻があるうちにいくつかのエピソードを話すことで、感動がより深まるということなのだろう。「迷っていましたが、私、教師になります！」という若者に何人も出会った。今回は既に教師の道を進んでいるみなさんなので、「教師になります！」ということにはならないけれど、撮影時の苦労話などを集めて……と準備を始めたところでハッとなった。

映画を観たことがない若い先生も多く参加されるとのこと。観たことがない映画の話をするのは難しい。というか、そうした経験はない。さあ、どうするか。

映画の解説や評論をしたところで、観ていない人にとっては抽象的な話にしかならない。映画の初号試写を観た時のような「感動」を共有できなければ、大切なことが伝わらないのではないか。

私たちは、映画の企画書にシノプシスを添付する。シノプシスというのは映画のあらすじを記したものだが、単にストーリーを説明するものではない。その映画の中で、どんな登場人物が、何に感動し、どのように魂を揺さぶられたかを書かなければならない。

講演のスタイルとしては異例だが、映画の流れに沿ってストーリーを説明しながら、先生の言葉や生徒のリアクションを細かく紹介することにした。私たちが脚本をつくり、場面ごとに俳優と向き合いながら芝居をつくっていくように、どのような気持ちでそのセリフを発するのか、それを相手がどのように受け止めたのかを話すことにしたのだ。

こうした方法で再度映画を見直し、一場面ごとにこれは何を表現しようとしたシーンなのかを見ていくことによって、私自身にとっても新たな発見があった。

『学校』シリーズで描かれる教師と生徒の言葉のやり取りを注意深く見ていくと、いずれも相手がどう受け止めるかを考えながら言葉が交わされていることがわかる。映画のセリフだからあたり前だと思われるかもしれないが、登場人物が自分の気持ちや考えをただ発しているだけの映画も多い。ストーリーを進めるためのセリフが多く、相手を慮ってのセリフは意外と少ない。

教育現場を舞台にした映画だからなのか。それとも教師と教師、先生と生徒という関係性故のことなのか。この辺はもう少し考えてみる必要があるが、そうした言葉のやり取り、会話のキャッチボールの上に、映画『学校』

の感動が生み出されているのは間違いないと思う。
一方的に言いたいことだけを口にし、相手がどう受け取るかなどまったく考えない、そんなコミュニケーションが現代社会には増えているという指摘がある。それは人間関係が希薄になったことの裏返しかもしれない。そして、他人に対する想像力が大きく低下していることとも無関係ではないだろう。

『学校』シリーズをつくりあげた松竹大船スタジオには、どんな題材の映画であっても、登場人物の家族とその日常を丁寧に描くべきだとの考え方がある。そのためには、机の上で想像をふくらませるだけではなく、実際の生活の舞台に足を運び、丹念に取材することが求められる。『学校』シリーズの場合は、夜間中学や高等養護学校に出向いて授業を見学したり体験することはもちろん、なるべく多くの先生や生徒に話を聞き、その日常生活を詳細に取材するところから脚本づくりがスタートした。
映画の仕事をしていると、世の中には知らないことがたくさんあるということを思い知らされる。だからとりあえず現場に足を踏み入れる。自分の限られた知識や経験をもとにつくられた物語だけでは大きな感動は得られない。つくられたドラマをではなく、日常のディテールの中にこそ想像を超えた驚きや発見があるのだ。
講演の中でも触れたが、映画づくりの中で出会った教師のみなさんが語ってくれた言葉は、年月を経ても印象に残っている。
「夜間中学の教師は、生徒が言ったことに駄目だと言ってはいけない。答えたこと自体を評価するべきなのだ」
「今日は暑いなと思ったらそっと窓を開ける。寒いと感じたらストーブの火を強くする。教師が出来ることはそんなことぐらい。生徒が今、何を考えているか、何を感じているか。それがわからないのであれば、どんな高邁な教育理論を語っても意味がない」
「この子たちがどんな花を咲かせるかはわからない。どんな肥料が必要かはもっとわからない。だから僕たちは考えられるすべてを与えるのだ」
これらの言葉には、想像力を駆使して生徒と向き合い、慮っているからこその強さがある。『学校』が封切られた頃、ある少年事件に対して識者のこんなコメントが新聞に載ったことがある。
「彼らは、山田洋次監督の『学校』という映画を見たことがあるのだろうか。見ていたら、あんなことをしただろうか」
私たちは映画の中で何かの答えを提示したつもりはない。ただ、映画というドラマの中で葛藤する教師と生徒を描いただけなのだ。
葛（かずら）と藤（ふじ）がもつれ合うような対立や苦悩を描くことがドラマであり、映画なのだが、葛藤に立ち向かう主人公だからこそ、その言葉が観る者の心に響くのではないか。『学校』という映画が少年たちに響く言葉を持っているとすれば、そこに登場する先生や生徒がきちんと葛藤に向き合っているからではないか。
講演の準備をする中で、私はそんなことを考えながら

パソコンに向かい、資料を整理していた。こうした機会がなければ得られなかった「発見」と言える。

さて、そうして迎えた講演本番。想像していたよりさらに若い先生方が多く、爽やかな、明るい雰囲気だなというのが第一印象。壇上に掲げられた「教育現場へのメッセージ」という演題に対する言い訳からスタートしたのだが、果たして20数年前につくられた映画の話が伝わるのかどうか。確信が持てないままの滑り出しとなった。

私は映画の演出を通じて俳優やスタッフに言葉をぶつけることはあるが、大勢の方々を前に話をするという機会は多くない。従って、話し方はぎこちなく、リズムも悪い。言い訳がましいが、それはそれでいいのではないかと思っている。

映画に出演する俳優と向き合う時、一生懸命覚えてきたセリフを立て板に水のように滑らかに、寸分の隙もなく喋る人に出会うことがある。そうした俳優には、わざと言葉を詰まらせたり、云い澱ませたりすることがある。芝居のセリフというのは、淀みなくスラスラと喋れば伝わるというものではない。逆にたどたどしい方がいい場合もある。

ドラマを演じる俳優のセリフも、本来は生身の人間性や人生経験、存在感のようなものがあってはじめてリアリティを持つ。ただ暗記しただけの言葉では何も伝わらない。

しかし、目の前にいる俳優に急に人生経験を積んでから喋れと言っても無理なので、暗記したままスラスラと言うのではなく、言葉を噛みしめるように、言葉を探しながら発しているように話させることがある。そうして、少しでもリアリティのあるセリフに近づけようとするのだが、そうする中で俳優自身が何かを掴み取る瞬間がある。

自分が学んできた狭い知識や価値観から解き放たれ、脚本に書かれたセリフにイチから向き合うことで、その言葉の裏にある感情や隠れた意図などに思いが至るのである。いい脚本には、脚本家の魂が込められていると言うが、表面的なセリフの文言ではなく、そのセリフに込められた魂を掴み取ることによって、映画を観る者に伝わるセリフとなるのである。

さて、話を戻す。『学校』『学校Ⅱ』がつくられた経緯に触れながら、私たちがどのような取材を行い、映画を組み立てていったか。映画を解説することほどつまらないことはないのだが、そこに登場する先生や生徒の発する言葉や感情を丁寧に見ていくことで、スクリーンで映画を観ているような体験をしてもらえればと工夫したつもりだ。

20数年前につくられた『学校』が、何故いまだに見続けられているのか。『学校』の脚本の1ページ目には、山田洋次監督による「製作意図」が記されている。

――教えることも学ぶことも、共に大きな喜びであるはずだ。「学校」が、教師にとっても生徒にとっても、楽しいところであって何故いけないのだろう。

20数年を経て、日本の学校は楽しいところになったのだろうか。映画で描かれた矛盾や問題は解決に向かっているのか。「実態は真逆の方向へ進んでいるのではないか」との声が聞こえてくると、教育現場にいない私たちも不安になってくる。

『男はつらいよ』に登場する寅さんは身近にいるととても迷惑な存在なのだが、そうしたはみ出した男を許容する寛容さがかつての日本社会にはあったのではないか。多様性を認めない、不寛容な時代になったと感じているのは私だけではないだろう。

そんな時代だからこそ、学校はすべての子どもたちを包み込む場であってほしいという願いは強くなっているのではないか。

映画というのは、それを観る者を映す鏡だという言い方がある。映画から何かを得ようとするのではなく、映画を観る人を映す鏡だと考えると、また違った価値が見えてくる。

蔵王での教育講座の2日目、分科会で行われた『学校』の上映会。

上映後の限られた時間で私が何かを話すのではなく、映画を観た先生たちに話をしてもらおうと提案した。映画を観た一人一人の話を聞く時間を共有することで得られるものもまた映画の重要な価値なのだ。

上映が終わった後、順番に感想を述べ合う中で、一人の先生が立ち上がったまま沈黙してしまった。必死に言葉を探しながら、やがて「すみません……」と言って着席したことが強く印象に残っている。映画を観終わった直後、その先生の胸の中にどのような思いが湧き上がったのか。言葉はなくてもその場にいた誰もが感じ取ったのではないか。そして、そんな瞬間を共有できたことの素晴らしさをみんなが感じたような気がした。

私は、映画『学校』の後半、イノさんは幸せだったのかと話し合う場面を思い出していた。

「授業で生徒に『学校』を見せて感想文を書かせています」という話を時々聞く。

2時間を超える映画である。授業の枠の中で鑑賞させるのは大変なのだろう。後日感想文提出というのも仕方ないのかもしれない。だが、映画の感想を述べ合う時間が持てたとしたら、もっと様々な発見や気づきに出会えるのにと思う。

何も高等な議論をする必要はない。『学校』の授業を思い出してほしい。映画の見方に正解はない。その人自身を映す鏡だと考えれば、異なる意見や感想が出て当然なのだ。むしろ違いがあるからこそ、いろいろなことが見えてくるのである。

学校教育の中でベートーヴェンやモーツァルト、ピカソやダヴィンチの名前は出てくるけれど、何故、黒澤明や小津安二郎の名前が出てこないのか。

世界最古の映画協会の一つである英国映画協会（BFI）が10年に1度発表している「映画監督が選ぶベスト映画」というものがある。そんな権威あるベストテンの1位に選ばれたのが、小津安二郎監督の『東京物語』である。2位『市民ケーン』（オーソン・ウェルズ監督）、3位『2001年宇宙の旅』（スタンリー・キューブリック監督）と続くのを見れば、世界がいかに日本映画を評

価しているのかがわかる。それを何故学校教育の場で教えないのか、というのは映画関係者共通の憤りなのだが、そんな権威主義的な言い方は別にして、音楽や絵画、文学や詩を学ぶのと同じように映画も教育の場で扱われていいのではないか、と思う。

映画の中には様々なものが詰め込まれている。知らない世界を教えてくれる。歴史や哲学、科学や芸術も含まれている。映画を学ぶことは、もっともすぐれた人間教育の方法だとする考え方もあるのだ。

話が少し逸れたが、今回の『明日の授業のための教育講座』で出会った先生方の言葉は、さまざまな困難を抱えながらもよりよい学校をつくろうとする静かな決意として私の心に響いた。そんな言葉のいくつかを紹介しながら稿を終えたいと思う。

「映画を観て、あらためて原点に帰ろうと思いました」

「途中から涙が止まりませんでした。私の拙い表現力ではうまく表せませんが、幸せってこういうことなんだろうなと思いました」

「学校って、本来こんなに素敵な場所なんだということをあらためて感じました」

「現在は、学校という場が行きたい場所になっていないのではないかと考えさせられました」

「学ぶことの中心の場が学校です。そこが幸福な場でなくなっていることに今日の日本の不幸があります」

「上映後の意見交流が大変よかったです。みなさんの思いが率直に伝わってきて感動がより深まりました」

「学校で学ぶ、教えるという原点にひたれた2時間でした」

「『教員は子供達に迷惑をかけられるのが仕事』という言葉にハッとしました」

「今の学校現場は、原点から離れて学力工場になっている気がします」

「こちらが教えるばかりではなく、児童たちから学ぶことを大切にしていきたいと思いました」

「自分のこれからの教員としての生き方に刺激を受けました」

「映画『学校』が私にとっての学校であり続けていることは間違いありません」

（松竹株式会社ＧＭ）

7月28日、遠刈田温泉で開催された宮城県教職員組合主催の今年で41回目となる『明日の授業のための教育講座』に参加してきました。大きなお目当ては、記念講演の阿部勉映画監督のお話を聞くことでした。山田洋次監督とともに、映画『学校』シリーズ4作品を作りながら、『教育の営み』や『子ども・青年の現実』にどう向き合ってこられたのか、予想通りとても興味深いお話を聞くことができました。

講演に胸を熱くしながら、休憩時間を利用して監督のもとへお邪魔し、センターつうしんに何とか寄稿していただけないかと懇願し、多忙な中を今回の原稿を書き下ろしていただきました。ただただ感謝です。

なお、当センターのライブラリーには映画『学校』の4つの作品のＤＶＤをそろえています。ぜひ地域での学習会などでご活用ください。（菅井）

つうしん95号
岩川報告を読んで

私の「あと30㎝」

かず君とわたし

中原和子

岩川さんの講演記録を読んで何ともあたたかい気持ちになりました。そして、直接お話を聞きたかったなあと思いました。

そんな時、小学1年生のこう君のお母さんからメールが届きました。夏休みの個別面談の時に授業中の写真を見せられ、話を聞く姿勢が特に悪いと指摘されて悩んでいるというのです。岩川さんの話を読み、メールを見ながら、私は小学校に勤めていた頃の受け持っていたかず君たちのことを思い出しました。

かず君は入学前にＡＤＨＤ（注意欠陥多動性障害）と診断され、医師からは学級という集団の中でみんなと一緒に学ぶことは難しいと言われたそうです。入学してから3日目の朝、体育館で職員写真を撮っていた時、か

7月に発行した「つうしん95号」で、埼玉大学の岩川直樹先生の講演記録「30センチの向こう側へ」を特集として組みました。タイトルの「あと30センチ」というのは、他者への関心の向け方のことです。

〈あと30センチ。しかし、それがやけに遠い。他者を操作し自己を防衛する技術の鎧を身にまとうことが「有能」とみなされるこの時代、私たちはその鎧を脱いで肌をさらそうとしない限り、ふれることも、ふれられることもできない。（略）子どもの葛藤や格闘に応える学びを探り合い、あと30センチで生まれるコンタクト。学校は、そこを起点としてあらゆることを問い返す〉という訴えから始まった講演。

講演は人間の基本的な関心と応答の営みが『ケア』であるとし、誰かにケアされる自分、自分をケアする自分、誰かをケアする自分という『ケアの三角形』の話や、それとは真逆の、誰かにモノサシをあてがわれ、いつも比べられている。自分もそのモノサシで他人をみてしまうという関係に陥る『モノサシの三角形』の世界。学生たちが使う「コミュ力」や「コミュ障」さらに

ず君が「ママ！。」と言って飛び込んできました。体育館は入学式をした所ですから、そこにお母さんがいると思ったのでしょう。それからも教室を飛び出すことがありましたが、彼なりの理由がちゃんとあったのです。それから、授業中に「できない！」と大声を出し、教科書などを机にバンバンたたきつけることもありましたが、それはできるようになりたいという欲求の表れだったのでしょう。かず君とは1年生、2年生と2年間を過ごしました。

2年生最後の国語の授業は『スーホの白い馬』でした。かず君は、少年スーホと白い馬の心の交流を書いた、このお話が大好きになりました。同じ時期に図工では紙版画をしていて、かず君は『雪の像を見て、すごいと喜んでいるぼく』という作品を作っていました。とてもうれしそうに笑っている『ぼく』を作った後、私の所に来て「ねえ、白い馬ってどうやって作るの。」と言うのです。周りの子たちが「かず君、これだよ、これ。」と赤羽末吉さんが描いたさし絵を指さすと、彼はこっくりとうなずいて作り始めました。そして、でき上ったのが『ぼくと白い馬』です。

かず君とのそんな思い出とともに、何人もの子どもたちのこと、その時々にあったことなどがよみがえってきました。あと30センチ近づいていたら、もっと別な見方や関わり方があったのではないかと思うこともありました。そして、先生の目には困った子と映るこう君も、彼の方に近づいたら、そこから見えてくることがあるのでは、と思いました。

今、学校はとても忙しくて大変だと聞きます。でも、まずは自分が受け持っている子どものことを同僚に話してみる。悩みも話してみる。そんなふうにして、ささやかでもいいから子どもたちのことを語り合う輪が広がっていったらいいなあと思います。

（仙台・元教員）

は「ぼっち」「イツメン」などの用語も『モノサシの三角形』から発生するという。そして最後に紹介した埼玉県と東京都の小学校での1年生と6年生の具体的な子どもと教師の関わりは、聞いているだけで目頭が熱くなる内容でした。

岩川さんの講演内容を、つうしん読者のみなさんの経験に引きつけて見つめなおしたり考えることで、その内容をより具体的に豊かにしたいと思い、今回は〝私の「あと30センチ」〟として、それぞれの方に経験や思いを書いていただきました。

（事務局）

越えさせるものは何だろう？

佐藤正夫

私は岩川さんの話を聞きながら、二人の子の顔が浮かんできた。

初めて1年生を持ったときのMちゃん。静岡に転校していった子どもの家からみかんがど～んと一箱、学級に送られてきた。みんな大喜び。もちろん私も。帰るときに、「一人2個ずつ持って行っていいよ。」と手渡した後、確かめるために、「みんな両手に持って挙げてごらん。」と促した。ざっと見渡すと3個持ってる子がいる。悪ガキなら納得したが、純真この上ないMちゃんだったことにショックを受けた。ズルやいい加減さなど見たことがなかっただけに、こんな一面もあったのかと正直がっかりした。みんなが帰った後、「どうして2個じゃないの？」と尋ねてみた。すると、「これがわたし、これが妹、これがいちばん下の妹。」と言いながらみかんを3個机に並べた。私は腰が抜けた。この子は、自分のうれしさを誰に伝えようか、誰と分かち合おうかと考えていたのだ。私は2個ずつ配ることと子どもの喜ぶ顔があれば十分だった。その時初めて、子どもの行動や行為は豊かな感情（良い悪い含めて）によって引き起こされているのではないかと思った。決まりは守りなさいと注意していたら、Mちゃんのやさしさや姉妹思いの内面を見ることはできなかっただろう。未熟だった私に、〝見えるものだけでは足りないですよ〟と教えてくれたのだと思った。Mちゃんは今でも私の師匠となっている。

3年生になって1ヶ月が過ぎたころ、Aちゃんが行方不明になった。朝、「行ってきます」と家を出たが、学校には来なかった。とにかくみんなで探し回った。一向に足取りがつかめない。昼になっても見つからないので捜索願を出した。その間、Aちゃんのことを思い返してみた。笑った顔が浮かばない。そういう子なんだろうかと思っていた。がちゃがちゃした学級にいても、自分のことはちゃんとやっていた。何だろう。よく分からなかった。

夕方近く見つかった。新幹線の白石蔵王駅で保護された。お母さんが迎えに行った。それまでに、Aちゃんの行動は警察か

ら伝えられていた。仙台駅から新幹線に乗り東京駅まで行ったという。そこから折り返しの仙台行きに乗ったようだ。お金がないので、ご婦人のすぐ後に、まるでその方の子どもであるかのようにして改札を抜けたようだ。大冒険をしたのだ。

二人が学校に来たときはもう真っ暗だった。奇しくも、校長と私は同じ言葉をかけた。「どうだった？　面白かっただろう！」Aちゃんは、「うん！」と言って、いろいろ話し出した。

クラス替えになり、友だちもうまくできずに寂しい日々を過ごしていたことを知った。笑顔が見えないことは分かっていても、〝呼びかけられている〟ことに気づかなかったのだ。岩川さんが「何の問題もないように見える子どもの中にも……」と話し出したとき、〝あっ、俺のことだ〟と消えたくなった。

この日、私は初めてMちゃんと向かい合って座り、ゆっくり話を聞くことになった。Mちゃんとの始業式だとしみじみ思った。同時に〝私だけが寂しいわけじゃないと思いますよ。よく見渡してみてくださいね。〟と教えられた気がした。このことがあってから、だんだん笑顔が見られるようになっていった。先生がちゃんと私の話を受け止めてくれたという安心感からのように思う。本当はそんなこと当たり前なのに。30センチは遠かったのだ。

いくつもの失敗を重ねながら私は、今見ている子どもの姿の向こう側に、もう少し確かなものがあると思うようになった。そこに近づくためには、学校モノサシではなく、普通の感覚でいようと思った。教室に入れば、昨日とは違う子どもたちの表情があふれているはずだ。うれしそうにしている顔、疲れた顔、いつになく静かにしている顔、それをちゃんと感じ取れる自分にしておきたいと思った。岩川さんが紹介している日高先生の学級に入ってくれたお母さん方のように。

（仙台・元教員）

子どもを多面的に見る

小澤　登

二年前に担任した5年生のH君の日記です。

『アマガエル』

「今日の夕方、まちづくりセンターのトイレでおしっこをしていたら、べんきの中に二ひきのカエルがいました。二ひきともアマガエルでした。おしっこをしているとちゅうで気がついたので（やべえ）と思って、とちゅうでおしっこをやめて、となりのべんきでしました」

H君は、私が担任した数多くの子どもの中でも、三本指に入るやんちゃな男の子です。学校や世の中のルールや常識を破ることを、先生や友達に「武勇伝」としていつも自慢していました。でも、こういう子はとても優しい面を必ず持っていることを私たち教員はみんな知っています。

H君は家に帰れば小さい妹をかわいがり、祖父が飼っ

ている数十頭の牛のお世話を喜んでしています。この日記を読んだ時、H君らしいなあと思い、一枚文集に載せて読み合いました。日記の中のH君の行いに、学級全体がふわっとしたいい雰囲気になりました。周りの子どもたちも、H君がどういう子なのかをよく知っています。この一年間、H君は毎日のように悪さをしましたが、それでも私は心穏やかに過ごせました。

子どもを多面的に見ること。やっと最近、少しはできるようになった気がします。

（丸森・大張小）

ケアされる喜びとケアする喜び

菅原梨沙

今まで、岩川先生のことを知人に伺うと、「あと30センチ」というキーワードを度々耳にしていました。どういうことか、とても気になっていましたが、直接拝聴する機会がありませんでした。今回、センターつうしんを通して岩川先生がお話しになったことを知ることができ、とてもうれしく思っています。

「ケアしケアされる関係が成立した時は不思議なことにケアした側の自分も元気になるということがあります。」という岩川先生の言葉に、「そうですよね！　私もあります。」とうなずきました。自分に誰かをケアする力があることはうれしく感じます。また、ケアすることが相手の喜びになるのであれば、それが見返りだと感じます。自分が誰かの役に立っているという喜びです。そういうときは、肉体的に疲れてはいても精神的には元気になります。学級の子どもが、じっくり教材研究をして行った授業でできるようになったとき。家で料理を作ったら、家族がおいしいと言って喜んでくれたとき。その誰かの役に立つことの喜びを感じる気持ちがあると、大抵のことは楽しく感じられます。単純ですが（笑）。

また、私は5年生の担任なので、私自身をケアさせる場面をなるべく作ります。同級生や下級生をケアさせる場面も多く作ります。それを通して、誰かをケアする喜びを感じてほしいからです。担任として、ケアさせる様々な活動や学習を一人一人に合わせて行うことができるように考え続けたいと思います。

ケアされるために「自分を開く」ことは勇気がいることです。例えば、自分を開いたことで、バカにされたり裏切られたりする経験をしていれば、心を開きたくないと思うでしょう。私は、嫌われたり笑われたりすることを怖がって、「自分を開く」ことができない子ども

でした。けれど、意図せず自分を開く機会があり、それを受け入れてもらった喜びを知ったときから勇気が出てきました。「あの心配は何だったんだ。」という気持ちです。

そして、なるべく初対面の人に会ったら、自分から開くことを意識するようになりました。すると、相手も開いてくれることが増えました。学級でも、子どもたちが「自分を開く」喜びが感じられるような関係を作りたいですし、私が子どもたちに対して、余裕をもって受け入れられる担任になりたいです。

これからも、ケアすることとケアされることの喜び、どちらも大切にして指導していきたいと思います。そして、子どもたちにも、幸せに生きるためにその喜びを広げていける人になっていってほしいと思います。

（亘理・吉田小）

共に学び・育つ

尾形誉子

私が教育に携わり始めたのは、「教育相談員」という立場が最初であった。仕事は、養護教諭の先生や担任の先生と連携を取りながら、登校渋りの子や不登校の子を支えていくというものであった。人一倍、悩みや生きづらさを抱えている子どもや親を支えるというのは、精神的にしんどく、私が抱えきれなくなることが多かった。「死にたい」「何もかも嫌だ」と訴える子ども、担任との折り合いの付け方に悩んでいる両親、「どうして学校に行けないのかわからない」と嘆く祖父母。立場の違う悩みをたくさん聞かせていただいた。未熟な私は、ただただ聞くことしかできなかった。その仕事で関った子どもたちには何もできなかった、と思い返す。こうした経験が、その後、教員になり、担任の立場から子どもたちのケアをしていきたいという思いになっていった。

教員1年目で出会ったMさんの話をしたい。

授業中、私の指導の仕方について、「先生、黒板の字見えない」「先生の教え方、全然わかんなかった」など、毎時間のように文句のような発言をする子であった。私は「正論だけど、一つ一つ受け止めるのはつらい……」と思った。「困った子」と捉えていた私は、同僚の先生に相談した。すると、「先生のことを困らせようとしてるんじゃなくて、その子なりに先生のことを応援しようと思っているんじゃないの」と。あぁそうだった、と初めて教壇に立った時、「先生も1年生です。間違っていることがあったら教えてくださいね」と話したことを思い出した。その後からMさんを「私にとっての応援団なんだ」と肯定的に思えるようになった。そう思っていると、自然と、Mさんの文句のような発言も少なくなっていった。思ったことが現実に影響を及ぼすのかと、不思議に感じた経験だった。

次にもう一人、他の学年を担任した時に出会った、理由なしに暴力をしてしまうSくんのことを話したい。

泣きながら、「なんでか殴っちゃった」「どうしたらいいかわかんない」と訴える。私も「どうしたらいいかな

……」とても悩んだ。Sくんは休み時間に喧嘩することが多かったため、まず、休み時間は必ず一緒に遊ぶようにした。そして授業の中でもミニゲームを取り入れるなど楽しいと思えることをすることにした。私も子どもたちと一緒に遊び、笑い、悔しい思いもたくさん経験した1年間だった。担任を離れてからその学級のお家の方々にお会いすると、「先生のことが大好きで、今でも話に出てきます」「○年生が一番楽しかったと言っています」などと聞かせていただいた。Sくんのための実践が、子どもたち全体へもいい影響を与えたのだと思う。「個」へのケアは「集団」にも影響するのだと、学びになった。

子どもたちの「個」を大切にしながら、「集団」で育てる。今はこういったことを意識しながら指導をしている。

（仙台・八乙女小）

本当は多様な先生と子ども達

佐久間　千枝

私が初任で就いた職場では、周りの先生達から失敗話は聞こえませんでした。きっとみんな上手くいっていて、そんな中で辛いことを話すのは甘えであり、社会人として恥ずかしいことだと当時の私は思っていました。

そんな風に自分をごまかしていると、もちろん歪みは子ども達に出てきます。不登校や、教室に入れない子が他の先生の目にとまり、やっと私は事実を話せました。その時、ベテランの先生に「学校は、いろんな先生がいていいのよ。いろんな人と関わって子ども達は大きくなるんだから。」と言われたことが、今でも私の中に灯り、辛い時や迷ったときは何よりも力になってくれます。「どんな先生に見られているか」とか「子どもがしっかりしていないとだめな先生」とかいろいろなモノサシにがんじがらめになりがちな若い先生は、今もやっぱりいます。気にしない、上手くいかないこともあるよ、ということが伝わればいいと思い、今では積極的に自分の困っていることを話すようにしています。困ったことはいっぱいあるから、話題には事欠きません。

岩川さんの講演記録を読みながら思い出していた子がいます。私が異動したての学校で受け持った5年生の中に転入生がいました。イラン人のお父さんを持つアミル（仮称）です。初日から鋭い目つきで人を見る、表情の固い子でした。このクラスでは色々あったのですが、その中でもアミルは、声も大きく攻撃的でとても目立ちました。理由を本人に聞いても「あいつが○○するから！」と、根本的な原因はわかりません。そんな中、保護者から、アミルが転入するタイミングで「ベストキッド」（2010年版）を見たことがわかりました。この映画は主人公のドレが引っ越し先で地元の子にぼこぼこにされるところから始まります。それを見たアミルは、「なめられたら大変」と、筋トレを始めたそうです。鋭い目つきの理由がわかりました。アミルを可愛く思えるようになりました。

ある日、隣のクラスの先生が暴れたアミルを連れて行

き、話を聞いてくれました。そこで話に出たのは、容姿に関することでした。イラン人の血を引いている彼は、はっきりそれとわかる顔立ちをしていました。その「人と違う」という不安を抱え、容姿について触れられるのを怖がっているのだと、やっとわかりました。アミルは、転校の不安と、どうしようもできないコンプレックスに押しつぶされそうな10歳の男の子だったのです。それでも彼との関係は修復できないままでした。学年の先生達と協力し、どうにか保った1年でした。

子どもの行動の表面は見えるのでよくわかります。でもその行動の裏側は直接聞いてもわかりません。あと30センチ、踏み込んで近づいていく勇気をこちらが持たないと理解できないのでしょう。もっと子どもと近づき合い、その思いや願いを汲み取れるようになりたいと思いました。

（仙台・八木山南小）

30センチの向こう側を感じること

里見 由紀子

保育園の午後のおやつの時間。1、2歳児のクラスD組では、みんな席について「いただきます」をしようと待つ中、保育士のGさんが何度呼びかけても男の子一人が席に着こうとしない。仕方なくGさんが歩み寄り、「もう、みんな待っているんだよ。……あれ、もしかしてウンチしてる?」頷く男の子。

これを見ている時、5月に聴いた講演の「あと30センチ近づいていたら」のフレーズが思い出された。近寄ることで感じられた、子どもの表情と臭い。言うことを聞かず、席に着いているみんなを待たせている子は、ウンチが出ていることに気づいてほしかったのか、と。

もう一つ、講演のフレーズ「ケアしケアされる」を思い出す場面が私にはある。バスの運転手が客が降りる時「ありがとうございました」と言うと、客も「ありがとうございました」なり「お世話様でした」なり言って降りる。お金を払って受けるサービスであってもケアされた（お世話になった）と感じお礼を言う。お金を払っているのだから当然のことと捉えず、お金が介在しても人と人の関係で「ケアしケアされる」を感じる、ってこういうことなんだなぁと思って見ていた。

講演から数ヶ月、保育園の職員に講演記録のコピーが配布された。講演を聴いていた園長の是非読んで欲しいという気持ちのようだった。感想文を書いてと声を掛けられ、「なぜ私が?」と思いながらも改めて文字となった講演を振り返った。

まず、「ケアの三角形」の3つの頂点は奥深い。他者をケアする、他者からケアされる、自分で自分をケアする。私は正直、「自分で自分をケアする」を忘れていたが、この講演が教育分野の講演であり、具体例が小学校の話であったことからとても考えさせられたことがある。

ケアというカタカナ語は私には医療・看護的なイメージをもたらすが、まさに医師は患者をケアしてくれる。でも、その医師が自分で自分を十分ケアできていないとしたら。当直明けでボーっとしながらの診察、残業が多く疲労の溜まった医師の手術、あるいは過密勤務で疲れている運転手の運転するバス。それは困る。

では、教員は? 自分がケアされた状態、つまり、心身ともに満ち足りた状態で無ければ他者を十分ケアできない。新聞などで、教師の長時間残業、精神疾患での休職の増加、小学校の英語や道徳の教科化など授業が変化しているとか、学力テストの対策やその点数での評価など報じられていた。教師が心身ともに疲弊していては子どもたちをケアしたくともケアできないのではないか、講演を聴きに来ていた先生方（小学校? 中学校?）は疲れてはいませんか? とつい言葉をかけたくなった。

もう一つ「モノサシ」という言葉。自他にモノサシを当て基準から逸脱していないかを常に計り、それから外れるものを欠陥ありとみなす。自分自身が基準から外れていないか、逸脱した行動を取っていないかを気にし、他者に対しても出来る出来ないと値踏みする。岩川さんは「コミュ力」「ぼっち」「イツメン」など学生の例を出され、つい「今の若い人たちは」と思いそうになるが、誰もがモノサシを内在している。私の中でもモノサシは常に動いていると思う。でも、この講演を聴いたからには、モノサシで計る→それがその人の（自分の）能力だからと切り捨てるという流れに、一歩立ち止まって考えるブレーキも常に発動させたい、そう思った。

そして、実例で出てくる子どもたち、先生たち、保護者たちの様子は温かく全ての子どもがこんな環境であって欲しいと願うものだった。保育園から小学校へ壁がある様に感じ、卒園児たちの行く末を案じることもあるが、こんな風に学生に教える教授、その講演を企画する教育関係の人たち、それを聴いている先生たちがいてくれることは教育の希望の光だと思った。

（朝市センター保育園）

「評価の三角形」を越える

鈴木康史

「30センチの向こう側へ」……印象的な表現だなと思いました。最近、いろいろな意味で人と人との関わりについて考えさせられることがあり、岩川先生の講演記録を「そうだよな。」と納得しながら読みました。

特に、印象深かったのが、「モノサシの三角形」の章です。岩川先生がお話なさった状況は、まさに私の生活そのものです。私自身が「モノサシの三角形」の中で生きているんだなと感じました。

「モノサシの三角形」って、私の言葉だと「評価の三角形」って言えると思うんです。人を「評価の目」で見ている自分にふと気付き、嫌になることが時々あります。最近はそういう機会が多くなったなとも感じています。

「GO！　DO！　教研」で尾木直樹さんが秋保に記念講演に来たとき、「私ねえ、教員やめてしばらく経つけど、最近ようやく、人を評価しないで、人と付き合えるようになったの。うふふ。」と、話していました。講演の主題とは離れた話題でしたが、それが一番印象に残りました。

学校教育という現場は、評価が付き物です。ねらいがあって評価があり、それは当然ですが、それが教員の生活全般に及んでいるように思います。少なくとも自分を振り返るとそう感じます。時には、家の周りに住むご近所さんのことまでも「評価の目」で見ている自分に気付きます。「こういう癖って、教員辞めるまで抜けないのかな。」なんて思ってしまいます。嫌だなと思います。

「評価の三角形」を学級に持ち込むと更に自己嫌悪になります。私としては、遅刻してくる子を「学校に来ただけ立派、立派。さあ、いっしょに勉強しよう。」ぐらいにしか感じていないのですが、同僚からの「評価の目」を感じて、しかも、時間に余裕のない生活の中で、なんとかしなくちゃいけないという思いが沸いてきて、その子を叱ったり、保護者に連絡したり……。ふっと落ち着くと、「何やってんだろ？」と我に返ります。

今年は持ち上がりなのですが、学年主任として、初めて学級担任を外れました。昨年、「評価の目」にさらされながら汲々と「指導」に当たっていましたが、今年は、昨年担任した子どもたちを違う目で見ている自分に気付きます。「遅刻したって大丈夫。ちゃんと学校に来て、勉強しているんだから。」と。立場の違いからでしょうか。

ハルト君、ケンタ君の例、とてもすてきだなと思いました。自分の内なる「評価の目」を越えて、自分自身、人に頼って、ケアを受け入れられるように変わった時、こんな実践ができるのかなと思いました。

（登米・佐沼小）

●教育時評

カタカナ英語の氾濫は何をもたらしているのか

本田　伊克

コンピテンシー、カリキュラムマネジメント、アクティブラーニング、アセスメント、スタンダードなど、教育の世界に英語に由来するカタカナ語が氾濫している。その意味するところもよく確かめられないまま、どんどん降ってくるカタカナ語が教育政策や学校教育計画のキーワードとして位置づけられ、教育現場でも何をどうしたらいいのか困っているのではないだろうか。

日本に住むわたしたちの多くにとって母語である日本語は、すべての人に内容をわかりやすく、はっきりと伝えられる強みがある。日本語は、「てにをは」を発達させて、文章の要素間の関係を明確に、念入りに伝えることにも優れている。

19世紀後半から始まった日本の近代化は、膨大な西洋テクストの翻訳作業と共に始まる。この翻訳作業を通して、近代化の範として「西洋」「西洋諸言語」が見出され、そこから再帰的に「日本」・「日本語」が限定されてきた。[1]

日本語は欧米の外来語を片仮名表記する手段をもっていたが、当時の日本の知識人たちは翻訳による訳語創出を試みた。このとき、漢字仮名交じり文をもつ日本語はその力を遺憾なく発揮した。漢字仮名交じり文は、もともとは日本の「他力本願の言語エリート主義者」が、日本語には「しまりがなく」「ふやけがち」であって、日本語はそれ自体として自立せず、漢文の支えがあってはじめて成り立つと考え、導入したものであった。[2]だがこうして漢文との密接な関係のもとに成立してきた日本語は、未知のものである欧米の思想や概念を摂取し、翻訳することでさらに発展していったのである。

その過程では、外来の思想や技術が、日本に伝統的な道徳や倫理との対決を経て強固な思想的基盤を形成する契機もあった。しかし日本の文化と言語はこうした構築を可能にする座標軸を欠いたまま現在に至っている。そのため、翻訳された西欧思想は容易に摂取され、私たちの生活様式や意識にとりこまれ「伝統化」される。だが、この「伝統化」は新たに流入した思想、概念、技術と日本に根付いているそれらとの対決と蓄積を経て歴史的に構造化されたものではないため、次に新しい思想が来ると忘れられ、またある時期に思い出されるということが繰り返され、歴史的基盤のない「精神的雑居性」のみが生まれる。[3]

太平洋戦争に突入した1940年代には、英語を始めとする外来語への嫌悪、排撃が先鋭化した。だが今日はまったく逆に、教育の世界に限らず日本の様々な領域で、英単語を翻訳せずカタカナ英語として安易に直輸入する風潮が散見される。そして、日本の言語と文化そのものが大きく侵食されているのではないか。

こうした状況を危惧してのことだろうか。2018年に改訂された高等学校学習指導要領では、それまでの必修科目「国語総合」を、「現代の国語」「言語文化」に変更した。「言語文化」では、「我が国」が繰り返し強調され、さらに「我が国の文化と外国の文化との関係」を理解させるとある。しかし、「言語文化」なるものが何であるかはよくわからない。

「江戸しぐさ」と「伝統的子育て」を日本古来の文化習俗とする「親学」の提唱者たちは、現在の政権の担い手とも近い関係にある。江戸しぐさや伝統的子育ては、その作り手が、自分たちの過去の経験を理想化し、歴史に投影して日本の伝統と言い張る、ノスタルジーの歪んだ発露にすぎない。江戸しぐさや伝統的子育てなるものにすがる風潮は、対米従属[3]が常態化した段階で、いつ起こるかわからないアメリカの裏切りに怯え、アメリカに従属しつつ反発する二律背反的な心性の反映としての復古主義、日本の新保守主義の歴史的・今日的性格を反映したものともいえる。[4]

日本が大切にすべき文化、価値、資源を続々と外国に売り渡しながら自らの権益には固執し、国民には都合よく呼び出した「伝統」「文化」を押しつけておけばよしとする権力者の欺瞞に踊らされてはいけない。

（宮城教育大学）

①酒井直樹『日本思想という問題―翻訳と主体』岩波書店　2012年
②田中克彦『ことばと国家』岩波新書　1981年　132頁
③松下晴彦「日本における翻訳実践の淵源をめぐる系譜学的考察」日本教育学会『教育学研究』第86巻第2号　2019年6月
④原田実『オカルト化する日本の教育―江戸しぐさと親学にひそむナショナリズム』ちくま新書　2018年　198―199頁

子どもと学校

親も子も共に成長を

鷲尾　仁美

今年4月、わくわくと、ちょっぴり緊張で小学校に入学しました。クラスは35人、教室にかわいい1年生が並びました。学校の様子をいろいろ聞いても「わすれた。」「わかんねー。」となかなか聞きだせず、家庭訪問をむかえました。そこで先生に学校での様子を聞くと、よくお腹が痛くなっていることを初めて知りました。ちゃんと話を聞いてやれなかったと、ものすごく反省しました。それからは、さりげなく、しつこく聞くようにしました。あいかわらず、あまり話してくれず、聞き出せませんが、どうも国語と給食の時間にお腹が痛くなることはわかりました。嫌いなものがあったり、時間内に食べきれないこともあるようです。お腹はすぐ治るようで、今では、「今日、給食全部食べた!」と自分から話してくれる日もあります。

入学してから、1ヶ月半ぐらいした朝、

子「学校行きたくない。休む」

私「なにかあったの?」

子「……。」

私「何か、いやなことあるの?」

子「図工がいやだ。」

私「え!　図工?」

(確かに家で絵を描いたりしてなかったな)

子「勉強がいやだ。」

子「学校すべてがいやだ。」

私「すべてー!?」

入学まで勉強なんてしてなかったし、決められた時間に、みんなと一緒の学校生活大変だな、私自身忙しさにかまけて、向き合えてなかったな、と思い、スキンシップも大事にし、「学校行きたくない」と言った時は、休んで一緒にゆっくり過ごしています。子どもの気持ち、意思を大切にしようと思っています。

私は、子どもが生まれて、新日本婦人の会という団体の子育てサークルに入りました。子育ての先輩にたくさん相談して、アドバイスをもらいながら子育てしています。先輩方からのあたたかい言葉に何度もすくわれました。子育ては、親だけが育てるものでなく、周りの多くの人たちの関わりの中で、親も子も成長し、育っていくのだな、と思います。

子ども達が大人になった時、どんな社会になっているのだろうと思うことがあります。子どもも大人も忙しく、競争、評価され、社会も考えも閉鎖的になっていやだなと感じます。誰もが認め合い、もっとのびのび生きられる社会を手渡したいと思います。子どもが希望をもって、未来をえがけるように、私も社会の中の一人の大人として、生きたいと思います。

(岩沼・主婦)

未来への希望を手わたしたい

及川さち子

ふと気づいたら、ふたりの子どもが中学1年になっていました。あっという間です。小さい頃からのことを思うと、自分のいたらなさでいらいらをぶつけてしまったことばかりで、もう戻ってやり直せないことがやるせないです。その時は、まっとうな考えによって腹を立てているつもりでいました。でも自分の心の中に不安や焦りがたくさんあって、どうしていいかわからなくなっていたんだと思います。本当に、子ども達に悪かったなと、今になって思っています。せめてこれからは、自分の感覚を押し付けるような関わり方を反省して、変わっていきたい。いつも元気な心でいることは難しいかもしれないけど、その日、その時を大切に過ごしていきたいです。

子ども達は、これからどんなふうに生きていくのでしょうか。人類の過去と未来をとことん行ったり来たりして、たくさんのことを感じて、今をどう生きるのか、考えてほしいなと願っています。急がずに、豊かな時間を感じながら、大人になっていってほしい。まわりの人達や、物事との確かな関わりの中でゆっくり成長していってほしいです。

子どもと学校

今は、先生が本当に大変すぎると言われています。ゆとりと、やりがいと、楽しさがいっぱいある職場であってほしいと思います。政府だって、もう戦闘機なんて買っていないで未来のために大切なことに、しっかりお金を使ってほしいです。

地球そのものが元気でいられるように、みんなで真剣に取り組まないといけない時代だから、身近なことについてしっかり考えることと、広い視野でとらえることと、両方をバランスよく養っていってほしい。これまで人々は、こんな失敗もしてきたんだよと伝えて子ども達に学んでもらいたいです。そして、今の時代に乗りこえなくちゃいけないことが、どんなことなのか、どうやって解決しようとしているのか、たくさんの人達がそのために一生懸命がんばっているということを話して、未来への手がかりと希望を手わたしたいのです。

より良いものを生み出すために、お互いに違う意見を持っている時に、当たり前にそれぞれの考えを話して伝え合うことができるように……大人がそれを示さなくちゃ、だなぁと感じます。子ども達と共に、自分も成長していけたらいいです。

（岩沼・主婦）

個性を認める教育を

押野　身和

私には夫と17才、13才、7才の家族がいます。結婚前、4世代同居の4人姉妹、9人家族で育ったので、新婚時は帰宅の遅い夫と2人の生活はさみしかったです。子どもが増えていく中で忙しくもあり賑やかになりました。

しかし、子どもが生まれたからといって、すぐ親になれる訳ではありません。成長を見守り、過ぎていく暮らしの中で、様々なことを乗り越えながら、親としても一緒に成長させて頂けると思うのです。だから子どもたちや夫に感謝して生活しようと思います。

そんな私が学校に期待することは、個性の尊重と多様な価値観を認めて誉めて、自己肯定感という心の根っこを大事にして欲しいことです。なぜかというと、将来、社会の中で生きていく上で、様々な考えの人々と共に暮らしていけるように、一人ひとりの持っている個性をお互い尊重することが必要だと思うからです。学校教育でこのことを学んで欲しいと期待します。

学校教育の一番の良いところは、同年齢の友達と一緒に過ごすことに尽きると思います。人の一生を考えると、ある意味、特殊な時期で貴重なことだと思います。社会に出れば、異年齢の多様な考えを持った集団の中で生活します。皆違って当たり前。例えば障害を受け入れたり、違う価値観も理解するということです。

先生も親も人なので、個々が持っている考えは異なります。夫婦でさえも異なります。子どもも。我が子3人、同じ母から生まれ、同じように育てたつもりでも、幼少期から個性が違うと思いました。兄弟なので似ているところもあると思いますが、興味関心が成長する中で違うこともあり、個性様々と実感しました。

子ども一人ひとりが大人になり自立して生きていくとき、自分の居場所を見つけ、仲間と協力し自信を持って生活してほしいと願っています。学校では画一的でない、個性を認める教育を行ってほしいと願います。

そして、家庭をまず安心できるところとして、核となる夫婦が仲良く、子ども一人ひとりの良いところを認めて誉めて伸ばすこと。それによって自己肯定感が高まり、幸福感をもって、どんな困難にも自分なりに乗り越えていけるように応援していきたいです。私が親としてできること三つを励んでいきたいです。一つは黙って美味しいご飯を作ること。二つはにこにこ笑顔で生き生きと生活する姿を身を以て見せること。三つは感謝の気持ちを大事にすること。子どもや夫のおかげで一緒に親にならせて頂けるのだから、生きている限り頑張りたいと思います。

（仙台・主婦）

わたしの出会った先生 27

こうして今の「私」がある

小幡　佳緒里

これまでたくさんの先生に出会いました。今回、私が出会った先生方をご紹介できることがとてもうれしく、お世話になった先生一人ひとりを思い浮かべたのですが、お伝えしたいことがたくさんありすぎて制限字数におさめることが不可能でしたので、東京の下町育ちの私が小学生時に出会った2人の先生をご紹介したいと思います。

小学3年生時の担任のN先生。ベテランの女性で、挨拶から雑巾の絞り方まで事細に指導してくれました。当時の私は、優等生の兄と比較されて自己評価がとても低く、何をするにも消極的でした。N先生は、そんな私に、いつも「あなたはできる子なのよ」と言ってくれました。母に対しても、兄と比較してはだめだと厳しく注意してくれました。N先生のお陰で、私は少しずつ自分を認められるようになり、今があるのだと思っています。

次に、小学5、6年生時の担任のK先生。20代後半の男性で、休み時間や放課後は、毎日のように校庭でサッカーを教えてくれる、面倒見の良い先生でした。

5年生になって間もなく、クラス内でいじめがありました。Aさんは、一部の生徒から揶揄われ、時には男子生徒から暴力を振るわれることもありました。私は、Aさんがクラスでいじめられているのを見て見ぬふりをし、時には、他の生徒と一緒になって揶揄われるAさんを笑いました。気持ちのどこかでは悪いことをしていると思いながら、自分からやめようとはしませんでした。ある日、私はK先生に呼ばれました。その瞬間、Aさんをいじめていることを怒られると思いました。ところが、K先生からは予想外の言葉がありました。「Aさんと友達になってくれないかな」答えに困っていると、K先生は、「信じているからね」と続けました。

私は、K先生にそう言われてしまったので、Aさんと友達になろうとしました。当初は声をかけることも緊張しましたが、挨拶をし、休み時間に声をかけ、放課後遊びに誘うようになりました。打ち解け、仲良くなるうち、Aさんをいじめる生徒がいれば注意をするようにもなりました。そのうち、他の生徒たちもAさんと話をするようになり、5年生の後半になる頃には、Aさんをいじめる生徒はいなくなりました。あの時、私がK先生にいじめを注意され、叱られるだけだったら、罪悪感だけが残り、Aさんと友達にはなれなかったでしょうし、クラスからいじめもなくならなかったのではないかと思います。K先生の対応には感謝しかありません。

K先生の思い出をもう一つ。小学6年生の社会の授業時。いつもは明るいK先生が教室に入ってきて、言葉を発することもなく、黙って黒板に「青い空は」という歌の詞を書き始めました。

「青い空は青いままで子どもらに伝えたい燃える八月の朝影まで燃え尽きた父の母の兄弟たちの命の重みを肩に背負って胸に抱いて」

歌詞を全て書き終え、K先生は、静かに話をしました。戦争で多くの人の命が奪われたこと、この詞は、二度と戦争をしてはいけないという思いが綴られているということ。そして、「日本国憲法」には二度と戦争をしないという決意が書かれているのだということ。私は、それを聞いて、「日本国憲法」がとても好きになりました。日本は、戦争で多くの人の命を奪ったことを心から反省して、二度と戦争をしないと誓い、あの前文を残した、それが誇りに思えました。私が今でも憲法を誇りに思い、前文や9条を守りたいと思っている出発点は、あのK先生の授業にあります。

あれからもう30年以上がたちました。

先生方のお陰で今の私があると、心からそう思えます。先生方一人ひとりに感謝の気持ちを伝えたいです。

（仙台・弁護士）

をするためには

みやぎ教育相談センター
菊　田　絹　子

「今日初めて他人と話しました」とそれまで考えていたことをとうとうと話し始める人。「心を開いて安心して話せる人が身近にいない」と日ごろの悩みを訴えるご婦人。相談センターには我が子の相談ばかりでなく大人の方ご自身の相談も寄せられます。お話を聞きながら、この電話をかけようと思い立ちダイヤルするまでの相談者の葛藤が思われ、悩みや考えをしっかり受け止めなければと気が引き締まります。

親がよかれと思って続けた躾が、子どもの受け取り方とすれ違って、子どもにとっては傷になる。子どもが心に受けた傷は根深く、その人の人生を左右するほど重大な影響を与えることもあると、相談を通して教えられました。

Aさんは、子どもの性格や行動は、両親の影響が大きいと考えているようです。

「子育てをする若い親は、子どもが失敗したとき、乱暴な言葉で叱って子どもを怖がらせてはいけない。子どもは親の顔色ばかりうかがって行動するようになる。優しく話してあげれば子どもの心は傷つかず親の言葉を受け入れることができる」と。両親が子どもと接する時、急がせたり乱暴に話すことのないようにすべきだと熱心に話します。また、

「自分が幼い頃、失敗すると母親は大声で叱るばかりで、どうしたのと聞いてくれなかった。そのような育ち方が大人になっても影響し、大きな声で怒鳴られるとお腹がびりびり、胸がどきどきする。今でも体が痛くなったり、呼吸がつらくなることがあるため医師から薬を処方してもらっている。叱って育てるという母の姿勢がこんな自分にしたのだ」

と言うのです。

Aさんより年配のBさんは、

「子どもの時から親の期待に応えようと努力してきた。しかし、期待に応えることができなかった。その結果、親は自分をちゃんと見てくれなくなった。そしたら、自分のやる気がなくなってしまった。現在の自分は本当の自分ではない。自分にはもっと力があるはずだ」

親が子どもを信じて待っていてくれたなら、とこの十何年悩んできたと訴えています。本当の自分を理解し支えてくれる存在を今も求めています。

〈相談活動の例〉

Aさんとの相談を通して、親からの影響を乗り越えようと努力している様子を紹介したいと思います。

当センターでは、Aさんの現在の課題は、親から自立することではないかと考えました。Aさんと話し合い、これから自立した生活ができるようになるため、読み書きを学習して家電の説明書やレシピ、新聞を読めるようにしようという目標を立てました。Aさんが中学生の頃は不登校だったので漢字の学習が不足していたのでした。学習を始めたころは、つまらなくてやめようとしました。ところが学習が進むと漢字って面白いと興味を持つようになりました。相談員はAさんに成功感を味わってほしくて漢字の十問テストを取り入れたりもしました。満点を取った時は本当にうれしそうでした。大きな花丸は大人になってもうれしいものです。気が付くと一年間休まず学習を続けていました。

教育相談センターに来る日の前日になると、必ず「明日は休むかもしれない」という電話をよこしました。不登校だった頃のように、登校する日の朝になると、体調が悪くなり自分の心がくじけてしまうのではないか心配になるようでした。休まないで行きたいのに、具合が悪くなったらどうしようという不安な気持ちと闘っていたのだと思います。「休んでもいいよ。無理はしないでね」というのが相談センターの姿勢です。「頑張って来なさい」とは言いません。無理強いはしない。あなたを待っている、大切に思っているという相談員の気持ちを伝えたかったのです。

「休んでもいいよ。Aさんの体が大事だもの。無理しないでね。来られるようになったら、遅れてもいいから来てね」

この言葉を聞き、弱気な自分を奮い立

相談センター報告（第18回）

親から自立

たせて次の日の朝、早いバスに乗って通って来ました。Aさんの健気な行動に胸が打たれます。

3年目になり、漢字の部首や成り立ちに興味を持つようになると分厚い自分の漢和辞典を持ってくるようになりました。自分が疑問を持った文字を調べノートに書くという行動が自然にできるようになりました。漢和辞典で文字を調べているAさんに、「あなたは優秀な生徒だね」とほめたことがありました。他人から評価されたり命令されることを嫌うAさんですが誉め言葉を否定はしませんでした。

最近、辞書を引きながら、

「私に、優秀な生徒だって言いましたよね」

と念を押すように、話しかけてきました。

「そうだよ！　Aさん。自分から進んで漢字を調べている様子が楽しそうだったね。自分なりの目当てをもって努力をしている人を優秀な生徒と言うんだよ。このような学習態度でこれからも続けてほしいな」

と答えました。その後、たびたび「優秀な生徒」と言ったことを確かめられました。それだけの話ですが、もしかしたら、Aさんは自己肯定感を持ち始めたのではないかと思いました。普段は褒められると話をそらしたりするのですが、このときは違いました。自分から学習に取り組んでいることが素直にうれしかったようです。勉強に対する気持ちが変化してきたことを実感し、「知らなかったことを知るのは楽しい」と思うようになったようです。多分、今まで経験したことがなかった気持ちになったのではないでしょうか。

Aさんは子どもの頃は叱られてばかりいて、自分はだめな人間だと思いこみ、自分から進んで学習するという気持ちになれなかった。学校に通う気にもならず、不登校になった。そのような自分が嫌だった。しかし、今は違います。重い辞典を持って来て漢字の意味や成り立ちを調べ面白いと思う。新しい知識に触れることが楽しそうで、いい顔で学習している。今までとは違うぞ！　と感じていたに違いありません。Aさんは評価されることを好みません。自分は親の期待に応えられなかっただめな人間だと思っているのですから、誉め言葉は口先だけだと思っていたのです。自分の話を聞いてもらい、励ましてもらうほうがずっと心が休まると思っていたのではないかとおもわれます。

この2～3年、Aさんは漢字の学習を通してできるようになったことがいくつかあります。挑戦したことをあきらめずやり遂げたこと。言い訳が減り、自分の間違いを認めるようになったこと。自力で学習したいことを見つけ取り組もうとする態度がみられるようになったこと。

間違えたらできるまで何度でもやり直せる、間違うことは恥ずかしいことではないと思えるようになってきたこと。相談員が失敗すると「人間は間違うものです。失敗は成功の元」と他人への心遣いを見せてくれること。

良いところも悪いところもある本当の自分を理解し認めることができ、自己肯定感が高まれば、お母さんの態度に一喜一憂することが少なくなると思います。そして、母親に対してもっとやさしい気持ちになれるのではないかと思います。

本当の自分を理解してほしいという相談者の思いを受けとめ、自己肯定感が高まるよう応援していきたいと思います。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL ０２２―２７２―４１５２

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき９時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間，休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

おすすめ映画

「未知との遭遇」

宇宙を描いた映画で私の中の双璧は「２００１年宇宙の旅」と「未知との遭遇」である。その「未知との遭遇」がこの夏デジタルリマスターファイナルカット版で上映されるとあらば見ない訳にはいかない。

今回見直して改めて思ったのは、アメリカという国では宇宙や宇宙人に対してそのように見ているのだな、ということ。つまり国家が極秘のうちに宇宙人とコンタクトをとろうとしている、あるいはとっている、かもしれないというふうに。

そうして、秘密を守るための大がかりな演出（宇宙人とコンタクトをとる場所から人を立ち退かせるために催眠ガスをまいて、家畜を一時麻痺させ、毒ガスが発生して危ないからと立ち退かせる方法）も、あり得るかもと思わせる。

そもそも私たちはどこから来たのか、なぜ我々人類だけがこんな風に進化したのか、考え出すと超越的な何者かの存在を想像してしまうのは人間の性ではないかと思うが、それを神と呼ぶか宇宙人と呼ぶかはそれぞれの価値観によるのだろう。

わからなものに対する好奇心、そしてそれを説明したくなるのが人間で、今謎とされていることもやがては解明されていくのかもしれない。永遠の命を望みたくなるのはこういう時だ。自分が生きているうちに知ることができるのはどこまでなのだろう。

好奇心は猫を殺すらしい。知らなくていいことを知らないでおくのも知恵の一種かもしれないが、でも、知るべきことから目をそらしてしまうのはあまり良いとは言えないだろう。まずは知ること、それが大事、では知ったその後どうする？

（宮原　淳子）

センターの動き

〈7月〉

10日　理事長・専務から要望書への口頭回答を数見代表と一緒に聞く
11日　こくご講座第2回世話人会
12日　事務局会、つうしん95号発送作業
18日　午前・大槻先生来室、雑談。老後と老入る（おいいる）の違いについて語る。
20日　「教育」読む会　8名
22日　運営小委員会。所長後任問題協議
23日　市民の会事務局会&三谷さんを招いて統廃合問題学習会。第4回「1年生めんこいゼミ」の内容検討で正夫さん来室。
24日　理事長宛、小委員会からの要望書提出
26日　事務局会・つうしん95号合評会　つうしん96号企画決定
27日　第41回明日の授業のための教育講座（遠刈田集会）参加（清岡・菅井）
30日　臨床教育学会聴き取り調査　事前打ち合わせのため春日さん来室

〈8月〉

1日　第1回仙台市いじめ防止等対策検証会議傍聴（清岡）
6日　高橋達郎さん来室（午前）　つうしん別冊・八島先生特集打合せ（午後）
7日　夏のこくご講座。若い初参加者多数
21日　1年生めんこいゼミの打合せ。第2回仙台市いじめ防止等対策検証会議傍聴（菅井）。
24日　「教育」読者会。常連に加え、埼玉大の高橋哲さん、東北大の井本さん、更には宮城の会の賀屋さんも参加し12名で盛り上がる。夜は高橋さんを囲み懇親会。東北大の後藤さんも駆けつける。若手研究者の輪がセンターを通じて広がる
26日　数見さんの提唱する『いのちの教育史』研究会の合宿。中森さんと本田さんの2本の報告を聞く
27日　『いのちの教育史』研究会の合宿2日目。久保さん、鎌田さん、山岸さんの3本の報告を聞く。午後から市民の会事務局会議
28日　「1年生めんこいゼミ」の4回目。参加なく中止に。夏休み明けの勤務で疲れがピークなのかもしれない
29日　京都大学総長・山極寿一さんから高校生公開授業講師受諾のメール届く
31日　つうしん別冊、宮城の教師シリーズ八島先生特集の編集打合せ。算数・数学サークルから5名参加

〈9月〉

2日　哲学sirube、シュタイナーの3回目。
3日　こくご講座世話人会。内容決定、チラシ作成に入る
4日　内田樹講演案内チラシの母親大会袋詰め作業
5日　こくご講座案内チラシ印刷発注
8日　臨床教育学会聴き取り調査1日目。鳴瀬未来中の濱田・千葉さんから子どもたちのその後の話を聞く
9日　臨床教育学会聴き取り調査2日目。台風の大雨の中、石巻へ。雄勝の徳水さん、大川の佐藤さん、鳴瀬桜華小の井上校長と渡辺さんから話を聞く
12日　田中孝彦さんから講演の日程について連絡あり
13日　事務局会
14日　民教連代表者会。教科書問題検討委員会
17日　会館理事長との話し合い。並行して市民の会事務局会。活動方針案検討。午後、北村さんとつうしん96号の打合せ。入稿済みの原稿12本を渡す。中野さん、こくご講座の案内発送作業
21日　「教育」読者会。
22日　道徳と教育研究会。東京書籍「新しい道徳」（中3）の分析と、後半はＰ４Ｃの国際的な動向を学ぶ
24日　「みやぎ教育のつどい」事務局会
25日　こくご講座の代替報告者決まる
27日　事務局会。つうしん97号の企画についてなど協議
28日　「みやぎ教育のつどい」実行委員会

〈10月〉

4日　こくご講座世話人会
7日　つうしん原稿すべてそろう。午後、哲学sirube・シュタイナーの4回目

（菅井）

発行：(一財)宮城県教育会館 みやぎ教育文化研究センター　2019・10・18　発行責任者：菅井　仁
〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-2-45 フォレスト仙台４F　TEL 022-301-2403　FAX 022-290-4026
http://mkbkc.forestsendai.jp E-mail mkbkc@forestsendai.jp　印刷 株式会社きた出版